

対話型鑑賞

生活文化部 伊藤 絵美

自分がなぜ、そう感じたのか。何を見てどう考えるのか。美術術館が普及に取組み「対話型鑑賞法」を目にし、主体的な思考とは、自分に「なぜ？」を突きつける作業の積み重ねだとあらためて考えさせられた。

取材 最前線

対話型鑑賞では、作品名や作者という「答え」を指すのではなく、それぞれが感じた思いを交わして思考を深めていく。ガイド役が「なぜ」「どうして」と問いを重ねることで、発言が少なかった人も少しずつ思いを言葉にする。そこに「不

正解」はなく、互いの気づきはさらに対話を深めるきっかけにもなる。自分が口にする意見は、果たして本当に自分の思考によるものか。多くの情報が簡単に手に入る今、他人の意見や分かりやすい答えを借りがちではないか、と気づく。

10年近く携わる学芸員は「自分の意見を発して認め合う経験は、学びの自信回復にもつながる」と学校現場での活用に力を入れる。間違えたら恥ずかしい、と手を挙げなかった小学生のころを思い出す。覚えた答えは忘れることもあるが、考えた経験は消えない。子どもにとっても、大人にとっても有用な体験として、今後の広がり期待したい。